

±15.5/分で、心拍数の増加をみたものの変動係数は有意な変化を示さなかった。静注投与群でもそれぞれ、前 $5.8 \pm 2.2\%$ 、 $78.3 \pm 10.5/分$ 、後 $5.3 \pm 2.2\%$ 、 $82.1 \pm 11.9/分$ といずれも有意な変化を示さなかった。

15. Hypoxia の交感神経活動に及ぼす影響

松本 茂二 (新潟大学歯学部第1口腔外科)

Ganglioglomerular nerve (GGN) は、上頸神経節由来の節後交感神経として carotid body を神経支配している。今回、hypoxia がこの GGN の神経活動に及ぼす効果について、aortic nerve をすでに両側切断した猫 11 匹を用いて検討した。1) 自然呼吸下で、両側 carotid sinus nerve (CSN) 切断後 hypoxia の度合に応じて換気の抑制が出現したのにもかかわらず、GGN の神経活動は hypoxia で興奮した。この興奮効果は、頸部の交感神経幹を切断する事で消失した。2) 人工呼吸下で、あらかじめ両側 CSN 切断処置後の猫で、hypoxia は GGN の神経活動を増加させた。この効果は、ganglion blocker である mecamlamine 投与後消失した。以上の事から、hypoxia が GGN activity を興奮させる効果は、主に節前交感神経細胞に由来し、しかもこの細胞が、hypoxia に対して chemosensitive な機能を有する為であるといった事がこの実験から示唆された。

16. 長期留置硬膜外カテーテルの細菌汚染 —硬膜外膿瘍から髄膜炎を併発した 症例を中心に—

丸山 正則・穂刈 環 (新潟市民病院
麻酔科)

我々は最近癌末期痛患者に硬膜外モルヒネ注入による疼痛管理中、髄膜炎の併発を経験したので、その経過及び当院の硬膜外カテーテルの細菌汚染の成績を報告した。症例は38才乳癌で腸骨転移巣の疼痛管理のため硬膜外カテーテルを留置した。挿入部よりの薬液漏出のため2回再挿入を行ったが約4ヶ月間ほぼ良好な除痛が得られていた。最終カテーテル挿入後35日目に薬液注入孔より液体の流出が見られたが髄液とは考えずモルヒネ注入したところ意識消失を来し、熱発、頭痛、項部強直などの髄膜炎症状見られ、髄液所見から髄膜炎は明らかであった。抗生剤により比較的短期間で軽快した。CT 所見では硬膜外膿瘍は認められなかった。本例では何らかの

理由により留置カテーテルが硬膜を穿破したために髄膜炎が惹起されたと考えられるがこの様な報告はこれまでに見られない。当院の長期留置カテーテルの感染率は7%と他施設に比しむしろ低く、管理上の問題は特にないと考える。

17. 麻酔科病棟死亡症例の検討

藤岡 齊・北原 智子 (新潟大学麻酔科)
森岡 睦美・松木美智子 (新潟大学麻酔科)

麻酔科病棟開設以来4年間の入院患者214のうち4症例が死亡した。すなわち癌死が2、入院中の併発症による死亡が2である。前者の1は、腰背部痛の精査目的で入院させ椎骨の癌転移を見いしたが原発巣不明のまま、残る1は食道癌術後の創部痛治療中癌性心外膜炎による心不全で、両者とも入院1月たらずで死亡してしまった。後者の1は、閉塞性動脈炎による下腿潰瘍の治療中に脳梗塞ついで嚥下性肺炎を併発し、残る1は硬膜外血腫による下半身麻痺の経過中に重症褥瘡感染を併発し死亡した。以上の死亡症例の検討からペインクリニックでは疼痛箇所の治療にのみえてして目を奪われがちであるが患者の全身管理にも十分注意を払う事の必要性を痛感した。

18. 42日間の人工呼吸管理を行なった 破傷風の1例

天笠 澄夫・安藤 香子
加登 譲・尾野 隆 (山形大学麻酔科)
加藤 佳子・一柳 邦男

症例は43才男、草刈機で切傷7日目項部硬直開口障害、8日目ペニシリン G、テタノブリン、フェノバルビタール投与開始、CPK 値3,780、10日目後弓反張、牙関緊急へと進行。ICU にてジアゼパム、バンクロニウムを併用しサーボで調節呼吸。以後水・電解質や栄養管理、関節の他動運動を行なった。経過中発汗や激しい運動性血圧変動があったが重篤な不整脈はみられなかった。weaning の時期がわからないため漸減する CPK 値を参考にしつつ、バンクロニウムの減量増量をくり返し、人工呼吸開始41日目によりやく weaning、意識も回復し翌日には自発呼吸。幸い呼吸循環器系の合併症もなく経過したが、著明な四肢体幹の筋萎縮がありリハビリのため他院に転院。以上の症例に対し、文献的考察を加えて報告する。